

教育学部学生の学習生活についての調査研究 (第2報)

岡 本 洋 三

Research on the student life in the Faculty of Education,
Kagoshima University (II)

Hiromi OKAMOTO

1 調査の目的と調査方法について

今日の大学生の大学生活について主として学習生活の面の実態を明らかにすること、彼らの学習生活上の問題点を彼らのそれまでの生活のありかたとかかわらせてとらえることが、この調査研究の課題である。この問題意識から、筆者は1982年9月に鹿児島大学教育学部学生を対象に「教育学部学生の学習生活の調査」を実施し、その結果については、本報告と同題で「第1報」として先に報告した。今回はこの1982年調査のなかで明らかになった問題点を考慮して調査方法上の修正をし、1983年7月に実施したものである。前回調査との異同は主に次の諸点である。前回調査は予備調査的な意味があり、標本数をかなりおさえた(199)。そのため、当初の調査計画の主要なポイントであった「留年生(卒業延期生)」の学習生活上の特徴の析出が十分にできなかった。(留年生の標本が12と少なかった)。また、サンプリングの方法に問題があり、標本が小学校教員養成課程(以下「小学」と略す)の学生にかたより、教育学部学生の全体的な特徴がつかめなかった。作成した質問文は調査結果の分析からみて必ずしも有効でないものもあった。これらの点を考慮して、基本的な調査の枠組は前回と同じであるが、質問の構成や選択肢の設定を修正し、サンプリングにおいて「留年生」については別個に悉皆調査(実際には回答しない者が多く、48%の歩留り)的な取り扱いをし、また学部学生の全体をとらえるように工夫した。質問紙の内容は次の通りである。

第1表 教育学部学生調査

◎ 該当する回答番号に ○印をつけてください。

- 1 あなたの性別は 1) 男 2) 女
- 2 あなたの所属する課程は 1) 小学 2) 中学 3) 養護 4) 高体
- 3 あなたの所属する専攻・選修は 1) (教育・心理・障害児教育) 2) (国語・英語・社会)
3) (理科・技術・数学) 4) (家政) 5) (美術・音楽・体育)
- 4 あなたの入学年は、昭和 1) 57年 2) 56年 3) 55年 4) 54年 5) 53年～以前
- 5 あなたの大学入学は 1) 現役 2) 1年浪人 3) 2浪～以上
- 6 あなたの教養課程在籍期間は 1) 1年半 2) 2年 3) 2年半～以上
- 7 あなたの家庭の職業は 1) 農・林・水産業 2) 商・工業自営 3) 教員 4) 教員以外の公務員(公社員も含む) 5) 会社員等一般勤労者 6) その他
- 8 あなたの高校時代の生活について、当時のあなたの気持に一番近いのは 1) 充実, 満足 2) とくに不満はない 3) とくにないとも考えたことがない, なんともしない 4) いろいろ不満があっ

- た 5) はやく高校を卒業してしまいたいと思うことが多かった
- 9 あなたは高校時代、学校の勉強や受験勉強以外で、とくに「熱中」したものがありましたか 1) あった 2) なかった
- 10 あなたが「熱中」したものを次の中から1つ選んでください。1) 文芸(読書・創作) 2) 芸術(音楽・絵画などの鑑賞・制作等) 3) 映画・演劇(鑑賞や制作等) 4) 研究(学習・実験・調査等) 5) スポーツ(登山・旅行なども含む) 6) 社会活動(福祉・奉仕活動も含む) 7) 生徒会活動 8) 交友(恋愛も含む) 9) 他
- 11 あなたの高校時代、あなたに影響を与えた先生、あなたが信頼した、好きだった先生はいましたか 1) いた 2) いなかった
- 12 あなたはその先生のどんな点にもっとも魅力を感じたのですか。次の中から1つだけ選んでください。1) 学識の深さ 2) 授業が面白い 3) 指導の熱意 4) 誠実さに 5) 生徒とよくつきあう 6) 生徒の気持をよく理解 7) 生徒のことを心から思ってくれる 8) あなたかみのある人柄に 9) なんでも話せる信頼感に
- 13 あなたの高校時代、「親友」とよべるような友だちがいましたか 1) いた 2) いなかった
- 14 あなたが鹿児島大学教育学部を受験した理由(選択条件)を次のなかから2つ選んでください。1) 鹿児島大学に入りたかったから 2) 教育学部に入りたかったから 3) 地理的条件から 4) 学校(教師)の進路指導で 5) 親の希望で 6) とくに希望していたわけではない 7) 他
- 15 あなたが入学当時、大学での生活において期待していたことを次のなかから2つ選んでください。1) 大学の講義 2) サークル活動 3) 交友 4) 自由な時間 5) 親から自由になる 6) 自分の趣味を深める 7) 他
- 16 あなたの教養時代の学生生活は充実していましたか 1) 充実していた 2) なんとなくすぎてしまったが、とくに不満はない 3) むなしい感じ
- 17 あなたが充実感を感じたのはどのような面でしたか。前問の回答にこだわらず、該当するものにいくつでも○印をつけてください。1) 学問的な面(講義や自分の学習) 2) サークル活動 3) 交友 4) 社会的活動(ボランティアも含む) 5) 趣味的活動 6) アルバイト 7) 他
- 18 あなたは教養課程の講義にどのくらい出席していましたか(全体的に) 1) よく出席した 2) 科目にもよるが、比較的よい方だろう 3) 普通だと思う 4) 自分の関心のある科目以外はあまり出席しなかった 5) 全体としてあまり出席しなかった
- 19 教養課程の講義のなかで、あなたに強い影響を与えたものがありましたか。(たとえば、学問にたいする興味や関心を触発した、自分のもののみかたや考えかたを変えた、自分の研究(学習)課題を発見した、大学にきてよかったと思った……など) 1) かなりあった 2) いくつかあった 3) ほとんどなかった
- 20 教養課程の講義のなかで、あなたが興味や関心をもって受講していた科目はいくつぐらいありましたか 1) 10科目以上 2) 9~7科目 3) 6~4科目 4) 3~1科目 5) なかった
- 21 あなたは、現在所属している「専攻」・「選修」が自分に適していると思っていますか。1) 適している 2) わからない 3) 適していない 4) 教育学部自体が自分にあっていない
- 22 あなたは、自分の「専攻」・「選修」の学問分野については、他の専攻選修の学生より「より多く勉強している」と思いますか。1) かなり深く勉強している 2) いくらか多く勉強しているがそう差があるとは思えない 3) とくに中心をおいていない
- 23 教育学部の講義のなかで、あなたが興味や関心をもって受講した科目はいくつぐらいありますか。1) 10科目以上 2) 9~7科目 3) 6~4科目 4) 3~1科目 5) ない
- 24 教育学部の講義のなかで、あなたに強い影響を与えたものがありますか。(たとえば、学問にたいする興味や関心を触発した、自分のものの見方や考え方を変えた、自分の研究(学習)課題を発見した、大学にきてよかったと思った……など) 1) かなりあった 2) いくつかあった 3) ほとんどなかった
- 25 あなたは、教育学部の講義にどのくらい出席していますか(全体的に) 1) よく出席している 2) 科目にもよるが比較的よい方だろう 3) 普通だと思う 4) 自分の関心のある科目以外はあまり出席しない 5) 全体としてあまり出席はよくない

- 26 あなたは、これまでの大学での学習（教養課程を含む）で、どんな「力」を身につけたと思いますか。次の各領域・分野ごとに3段階（1…かなり自信がある 2…いくらか自信がある 3…とても自信がもてない）で自己評価して（ ）内に1～3で記入してください。
- A) 一般教養(外国語を除く) () B) 外国語 () C) 教科専門……人文科学 ()
社会科学 () 自然科学 () 芸術・体育 () D) 教職専門……教育学 ()
心理学 ()
- ※ 教科教育学は関係のある教科専門にふくめて、障害児教育学は教職専門の教育学か心理学のいずれかにふくめて考えてください。
- 27 あなたの「教育」や「教職」についての考え方は、これまでの教育学部での学生生活のなかで変わりましたか 1) 教師になってがんばろうという気持ちが強まった 2) 教師になることに自信がもてなくなった 3) とくに変わったことはない 4) 教職以外の職業を選ぶつもり

質問は大きく6つの領域で構成した。「属性」は7項目で、「4 学年」「6 教養課程在籍期間」で「卒業延期生」と「教養留年の有無」をチェックしている。「高校時代」には6項目を用意し、高校時代にどのような青年期をすごしてきたかをみようとした。「大学入学時点」は「大学選択理由」と「大学生活への期待」の2項目で、学生の大学生活についての目的意識や期待をとらえようとしている。「教養課程の生活」、「専門課程の生活」はそれぞれ5項目で、そのうち3項目は同じ質問文で、教養課程と専門課程を比較できるようにしてある。「20」「23」の「興味や関心をもって受講した科目はいくつ」という質問は、学生の学習意欲・自発性をみようとしたものである。最後に、「大学教育の成果」について学習成果の自己評価(26)と教育・教職観の変化の二つの面をとらえようとした。「26」の自己評価は各領域について3段階での評定を求めたが、サンプル回収後、A) 一般教養と B) 外国語の評点を合計して「一般教養」、C) の人文・社会・自然の評点を合計して「教科専門」、D) 教育学、心理学を合計して「教職専門」に縮約した。教科専門に「芸術・体育」を含めなかったのは集計点が2桁になると処理上困難であることが主な理由である。

サンプリングの方法は、通常の統計調査法の方法によらなかった。これは前述のように「延期生」の生活調査に一つの目的があり、在籍学生に占める「延期生」の割合は15%弱であるから通常の抽出法では延期生の標本数がかなり小さくなることが予想されるからである。この調査でのサンプリングは学部での必修講義の受講生（「教育原理」の「小学課程対象」と「中学課程対象」の2科目）に講義時間を利用して質問紙を配布・回収するという方法でおこなった。当初予定数より受講生はかなり少なかった（前期と後期で受講生数が変動する）ので「障害児教育」と「教育学」の2つの受講生も対象に加えた。以上の方法での標本数は265で、延期生は18(内数)であった。延期生名簿でこの回答をよせた学生を除いた全員に質問紙を郵送して、最終的には延期生の標本は55(48%)となった。標本と調査対象の母集団との関係は第2表の通りである。

第2表にみるように、課程別・学年別にみると抽出率はかなりバラツキがあり、比較にあたってこの点を考慮しておくことが必要である。通常の学生と延期生の関係では、小学と養護についてはほぼ同率とみてよいが、中学では約2倍、特別体育では約3倍の延期生が抽出された結果になっているので、中学や特別体育の全体的な特徴はかなり延期生の特徴に影響されていることが推測され

第2表 標本の構成

	小 学		中 学		養 護		特別体育		計	
	4年以下	延期								
在 籍 数	431	57	178	50	38	3	59	13	706	123
標 本 数	166	23	43	23	28	2	10	7	247	55
抽 出 率 %	39	40	24	46	74	67	17	54	35	48

（教養課程在籍数は除く）

る。課程間の比較も特別体育については標本数自体がかなり少ないから有効ではない。以下の分析では「延期生」については課程の区別をせず一括して取り扱い、また質問によって選択肢が多いものをクロスした場合、セルのデータ数がかなり小さくなるので、適宜大きな区分に集計し直すようにした。

さて、以上のサンプリングの方法上の問題とともに、この調査方法（専門課程に進学した学生を対象にし、講義受講学生から抽出したこと）には更に次のような問題が含まれていることをおさえておきたい。この調査は大学生の学習生活の問題点を発見すること、とくに「問題をかかえている学生」の特徴をとらえようと考え、「問題をかかえている学生」として「延期生」を指定した。第一の問題はこの「延期生」を「問題学生」と想定したことが妥当であるかどうかである。たしかに延期生は通常の学修期間で卒業できなかった学生という点で「問題」ではあるが、しかし通常の学生生活をおくっている学生に「問題」がないわけではない。この点については後の分析で検討する。問題は、延期生よりも長期欠席者や退学者などにあると思われるが、これがこの調査では対象から除かれていることである。また学部在籍者（教養課程をおえ学部に進学した者）のみを対象としたため、未だ学部に進学できず教養に留年している者が除かれている。従ってこの調査で対象とされた「延期生」は、少なくとも以上の2つのフィルターで除かれた残りの学生である。さらに延期生全員に質問紙を郵送したが、回収できたのは105のうち37（35%）で、恐らく回答しなかった学生の方が、より問題のある学生であろうと思われる。つまり延期生55のうち18名は講義に出席している学生であり、残りの37名も大学との心理的距離の近い学生であって、そういう点から云えば「問題をかかえている学生」とはいえないかも知れないのである。この点では通常の学生についても同様で、今回の講義時間を利用したサンプリングでは「問題をかかえている学生」が少なくなっている可能性を考慮しないわけにはいかない。以上のような点から「延期生」についても「通常の学生」についても、実態よりも「甘い」ものになっている可能性があることを、以下の結果を読むときに考慮しておく必要があると思われる。次の第3表は以上の考察の参考として最近5ケ年の退学者、教養留年者の状況をまとめたものである¹⁾。（教育学部のみ）

教育学部の退学者の在籍数に対する割合は、他学部にくらべて低く、また初年度の退学者が少ないという特徴がある。概して退学者の半数が教養課程であり、また満期退学者が多い。留年者の統計は説明を要する。本学部では通常の学生は、教養課程1年半をおえると10月に学部に進学する。

第3表 退学者と教養留年者

年度(昭和)	52	53	54	55	56	平均
退学者数	12	21	23	18	14	17.6
退学時期						
初年度	1	3	1	1	2	1.6
教養期間	2	4	6	1	2	3.0
教養満期	1	3	7	7	5	4.6
小計	4	10	14	9	9	9.2
学部期間	4	3	3	3	1	2.8
学部満期	4	8	6	6	4	5.6
小計	8	11	9	9	5	8.4

	当該年の10月						翌年4月		
	教養在籍 数	学部進学 者数	留年者数	前年からの 留年者数	右の学部 進学者数	右の再留 年者数	前年からの 在籍者数	右の進学 者数	右の再留 年者数
昭和52年	372	292	80	37	13	24	104	47	57
53	352	287	65	57	15	42	107	52	55
54	344	285	59	55	20	35	94	48	46
55	339	288	51	46	21	25	76	40	36
56	374	312	62	36	13	23	85	45	40
57	359	308	51	40	17	23	74	—	—
平均(除57年)	356.2	292.8	63.4	46.2	16.4	29.8	93.2	46.4	46.8
%	100.0	82.2	17.8	100.0	35.5	64.5	100.0	49.8	50.2

そのとき進学条件をみたすことができなかった学生は教養に留年し、翌年4月に再び進学の判定が行われる。52年の数値について説明すると、教養在籍数372は51年入学者の数であり、このうち292名が学部に進学し、80名が進学できず教養に留年することになった。この時、前年からの留年者(50年以前の入学者である)37名のうち13名が進学し、24名が再び留年をくりかえすことになる。この80名と24名の合計が次の欄の104名で、この学生は翌年(53年)4月に再び進学判定をうけ、47名が進学し、57名は再び留年をする。これが53年10月の前年からの留年者数57名になる。この調査の時点は7月であるので、教養留年者は相対的に少ない時期である。

2 教育学部学生の学習生活の類型

最初に、今回の調査のデータを多変量解析「数量化Ⅲ類」でパターン分類をした結果を報告する。この手法についての説明は省略するが、サンプル(学生)とアイテム・カテゴリー(質問にたいして選択された回答選択肢)との関係をパターンとしてとらえたもので、「同じような反応パターンを示すもの同志(サンプル)は近い値を、また同じようなものから選択される特性(カテゴリー)

